



ピッポ新聞

2002

5

No.163

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL&FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp/>Email pippo@diana.dti.ne.jp

ピッポ

メディア規制法案に反対です

『一九二八・三・一五』という小説をごぞんじでしょうか?これはプロレタリア作家小林多喜二の作品です。1928年(昭和3年)3月15日は、治安警察(特高)が、全国一斉に共産党を中心にした労働者・農民に対して行った大弾圧の日だったのです。この日、全国では2千とも3千とも言われる逮捕者がでたのです。

当時小林多喜二は小樽で銀行員をしながら、無産階級の運動に関わりを持ちはじめていました。彼はこの弾圧を間近で目撃し、それを作品化したのが『一九二八・三・一五』なのです。

この作品は、警察における拷問の場面など、あまりにもリアリズムに富んでいた(だから多喜二の作品の中でも評価が高い)ため、後に警察の恨みを買ったと言われるほどでした。

多喜二は、この5年後の1933年の2月20日昼過ぎに、非合法化された共産党の地下活動中に築地警察の特高に逮捕され、その約6時間後には拷問によって、虐殺されたのです。多喜二の遺体は、すさまじい拷問の後が全身に及んでいたそうです。

警察は多喜二の弔問に訪れた人たちを片っ端から逮捕し、多喜二の虐殺を隠蔽しようとしたのです。その根拠になったのが治安維持法だったのです。

この悪法は、権力が言論弾圧はもとよ、市民のすべての自由を力で封殺するための最大の武器だったのです。

器だったのです。

この後、治安維持法は拡大解釈(改悪もあつた)され、社会主義者のみならず、多くの民主主義者の学者や文化人、市民をも獄に繋いだのでした。

なぜこんなことを書き出したのかと言えば、ぼくは、今、国会に上程されているいわゆるメディア規制法案(個人情報保護法と人権擁護法案、後一つ青少年有害社会環境基本法案)は、明らかに戦前の治安維持法のような力を持って、やがては我々市民に襲いかかってくると思うからです。

マスコミは、報道の自由や表現の自由が侵されるからと、この法案に反対しているわけですが、このことは当然なことは言うまでもありません。しかし、マスコミの自由さえ確保されれば事足りるのでしょうか?

そんなことはありません。いかなる存在からも、市民一人ひとり自由でなければならぬのです。

すでに読売新聞は、妥協案を自紙に発表さえしました。読売の論理は巨大マスコミだけが自由であればよしと言うことなのでしょう。こういうのをマスコミの不遜と言うのです。

そうではなくて、市民の自由が保障されてこそ、初めてマスコミも公権力や企業から自由でいられるのです。

ぼくは、これらの法案は、紛れもなく市民の自由を規制するために権力が意図している法律であるという認識が必要だと思っています。

この法案に断固反対します。

つれづれなるままに

おじさんの春夏秋冬

穂高山行雑記

4月30日

連休の狭間を狙って、山登りに出かけた。今回は何故か穂高へ、それも北穂に登りたくなかった。穂高は10年前の夏、カミさんと息子と3人で涸沢ヘテントを張って以来だ。

松本からの一番の電車で新島々へ、ここからバスで上高地までいく。連休の狭間のためか、上高地へ向かうバスはすいていた。それよりも気になるのは天候である。夜行列車を降りたときから(なんだか、石川さゆりの歌みたい。こっちは上野発でなく新宿発だったが)、雨がずっと降り続けているのである。どの登山者の顔もさえない。上高地のバスターミナルで、登山届けを記入して、装備を整えて出発をする。

樹林の中を、傘をさして歩く。遊歩道の両脇には、ニリンソウやコイワカガミ、キクザキイチゲ、姥ユリ、コバイケソウ(多分?花が付いてないから余り自信がないのだ)やらが、すでに芽吹いていた。

木々の下に生きるこれらの植物は、雪解けが進んだ今、素早く芽を出し花を咲かせて子孫を残さなければならぬ植物たちである。木の葉が生い茂ってしまえば、受粉さえままならないのである。虫たちを惹き付けられるのは極めて短いあいだである。これらの花が咲くのは、早いもので2週間ぐらい後だるつか。

里では今年植物の成長が1〜2週間早い、山の植物たちも、やはり早いのだろうか?

予定通り、横尾に3時間弱で到着した。確かに今年、雪解けが早いようだ。ここまでほとんど雪を踏むこともなかった。相変わらず雨は降り続けている。この雨はもうやまないだろう。ただ気になるのは、気温が高いのである。ここまで手袋もいらなかった。

午前11時、涸沢へ向けて横尾を出発する。さすがここからは雪上歩行になった。横尾本谷と涸沢の出合いで休む。休むといつたつて雨は相変わらずだから、気分は滅入ったままだ。谷はまだ雪に埋まっいて、沢の流れは見えず、流れの音だけが雪の下から威勢良く聞こえてくる。

ここから涸沢までは本格的な登りだ。夏道とは異なり、10℃以上も雪に埋まった沢を直登していくのである。雪渓にはトレイルがはつきりと付けられているから、それを忠実にたどればよいのだが、雨のせいで雪が柔らかく、とても歩きにくい。

涸沢に午後2時50分到着。横尾から3時間50分ほど掛かった。(ちよと時間が掛かりすぎだ)

涸沢小屋に落ち着いて、全身濡れ風の装備を解いてホットする。一息入れてから、カミさんへ電話で、無事涸沢に到着したことを知らせる。談話室で、炬燵に入って横になり、他の登山客の話聞きながらウトウトした。5時に夕食が始まった。数えてみたら、今日の宿泊客は13人だった。

食後4〜5人で談話室でおしゃべりする。話の中心は天気のことである。雨はますます強く降っているようだ。今日、雨の中を穂高山荘まで登ってきたという人の話を聞いていたら、どうも雪の状態(腐っている)があまり良くないらしい。

話の具合で、ぼくともう一人が代表で食堂へテレビの天気予報を見に行くことになった。食堂ではスタッフが夕食中で、何と、今日の宿泊客より多い16人がいた。チラツと見たところ、客のメニューより豪華なおかずが並んでいるじゃないか!(これはぼくのヒガミかしら?)

TVはNHKのBS放送を映していた。予報は明日も余り良くないことを告げていた。

雪が腐った中を北穂沢を直登していくのは、雪崩の危険もあり厳しい。明日天気によっては、登るのを奥穂に切り換えることも考えよう。とにかく、明日は雨が止むことを祈って寝る。

5月1日

目覚めると、すぐ窓から空模様を伺った。どんより曇った状態であるが、雨は降っていない。しかし、気温は高目である。午後から回復に向かうというのだが、万が一(雪崩)を考えると北穂をやめ、奥穂を目指すことにした。これなら、穂高山荘まで登って天候が悪ければ、そこから引き返せばよいのだ。

6時半出発。ザイテングラート(途中にある岩場・夏はこの岩尾根を登る)目指して登り出す。涸沢ヒュッテからの3人パーティーがぼくの上を登っていた。ぼくはその3人をめざして雪渓をトラバース(斜め横上がり)して、かれらの後をおうことにした。

しばらくすると、ちよとしたアクシデントが起こってしまった。右足のアイゼンで左足のスパッツを引っかけて転倒してしまったのである。スパッツが20cmぐらい裂けていた。歩き出しで、アイゼン歩行にまだ慣れていなかったのと、持参したアイゼンがアイスクライミングにも使用できる12本歯の、前爪がクワガタムシの角のように長くて鋭いアイゼ

ンなのである。出がけに、いつも使用して慣れているいる 10 本歯のアイゼンが見あたりなかつたので、代わりに持参したのだ。

もしこれが、上のはハシゴ場や雪壁だったら、滑落してアウトだっただろう。そう思ったら、恐ろしさがかみ上げてきた。気を引き締めて登ろう！

ザイテングラートに近づくと、ルートを左か右か迷いながら登っていった。確か以前は左の小豆沢を直登した記憶があつたのだ。先行の 3 人は右を登っていた。その 3 人も距離がそんなに離れていないのにガスで姿が全く見えなくなってしまうことが度々である。今のところ天候の回復の兆しが見えてこない。

登っていくと、左の小豆沢を降ってくる人がいた。なーんだ、やっぱり左でいいじゃないか！ぼくは左のルート目指した。その降りの人の声が屈く距離になると、その人が「こっちは止めた方がいい。途中クレパスが 3、4 カ所あり、上りだと大変だから」と、忠告してくれた。

なぜぼくはルートにこだわったのかといえば、右のルートはみるからに急斜面であり、大変そうだったからである。(実は左だって大差はないののだが、まー、気分の問題なんだな)ぼくはアドバイスに従い右ルートを登ることにした。ここからなら、大したロスもなく引き返せた。

行けども行けどもザイテングラードの岩場を左に見ながら登りは続いた。トレイルは、この岩場の最上部を回り込んでいた。ぼくは、前の人の踏み跡を一步一步たどっているのだが、35 度を越す急斜面になつてからは、歩幅が合わなくて苦労していた。人それぞれ歩幅ってものは異なるのだ。

トレイルの歩幅がぼくに合わないのだ。しかたなくぼくは、時々トレイルの足跡と足跡の間にアイゼ

ンを蹴り込んで自分に合った歩幅の足場を新たに作るのであるが、なにしろ雪が柔らかくて蹴り込んで体重を移すと、雪が崩れて度々元の場所まで滑ってしまうのである。これだと体力を余分に消耗する。さきほどから、20 歩登っては、一息つく状態が続いているのである。あー苦しい！

これは歩行技術の問題かも知れないが、幾分はぼくの足が短いのが原因なのだろう。しかし、ぼくよりの足の短い女性(そんな人いるのかな?)だつて登る人は多いのだから、これはやっぱり、歩行技術の問題なのだろうか？

ようやく、岩場の最上部へたどり着き、回り込んだら。さらに雪の壁が続いていた。青息吐息。ルートは涸沢側に付けられていた。その斜面では 8 人が山岳ガイドの指導で、ザイルを付けて斜面の降り降りの訓練をしていた。休憩しながら、その様子を見ていた。ここまでくれば穂高岳山荘はもうじきだ。

小屋に着いて一本 350 円の缶ジュースを飲んで一息入れた。先行の 3 人は休まず奥穂を目指したのか、小屋には居なかつた。ぼくは少し迷つたが、(というのには、細かい雨が降り出していたのである)頂上を目指すことにした。

頂上へは、いきなり鉄のハシゴ登りから始まる。ピッケルをザックの後ろで固定して、両手両足を使い慎重に登った。ハシゴを 2 カ所通過して、雪のない岩場も通過、途中下を見ると、一直線に白沢に落ち込んでいる。もし、ここで今朝の様にアイゼンを引っかけたら万に一つも助からないだろうと考えたら、ぼくは 2 度と下を見る勇気は無かつた。

岩場を通過し、雪壁の登ぼりに掛かつた。雪が腐り気味だから、2 点確保を慎重に繰り返し、一步一步登った。ようやく壁を越えた。ここからは比較的なだらかな登りを 20 分も行けば奥穂の頂上である。

でも、北穂など周りの山が全然見えないのである。

ぼくは急に頂上まで行く気が失せてしまった。こはもう 3150 くらいは(奥穂高岳 3190 くらいで富士山、北岳に次いで日本で 3 番目に高い山である)確実に越えている。まだ頂上から戻ってくる人もない。引き返すことにした。雪の壁の降り高度感があり、ちよつとビビツてしまい、バック(登つた時の姿勢)で下つた。

今度は、穂高岳山荘は素通りで涸沢まで降ることにした。ザイテングラートの降りの途中からは、尻セード(雪面を滑り台の要領で滑り降りること)で降った。登ってくる登山者は、あきれ顔か、うらやましそうな顔でこちらを見ていた。もし、ぼくに仲間がいれば「ヤッホー」とでも声を出しながら滑つたことだろうが、一人じゃー声を出せば「バカ」と思われる恐れがあるから、声はださなかつたけれどもね。気分は良かったよ。

涸沢小屋に戻つて、テラスでリンゴの皮を剥きながら、くつろいだ。そういうえば、前回(12 年前)も登頂後、このテラスで涸沢の雪景色を楽しみながらリンゴを剥いて食べたことを思い出した。

午後 12 時半、涸沢小屋へ預けた荷をザックへ入れて、涸沢を後にした。皮肉なことに、途中で薄日がさしてきて、青空が少し望めるようになってきた。午後 2 時半過ぎ横尾へ下山。今日はこの横尾山荘に泊まるのである。

涸沢小屋もそうだったが、この山荘も新しく建て替えられていた。ここには風呂があるのだ。登山帰りの風呂は最高だからね。もう一つ、この山荘は一部屋 6 人であるが、2 段式のベッド(ゆつたり寝られる)なのが気に入っているのである。

割り当てられた部屋に入ると、先客が一人いた。その人と話していたら、なんと、今朝ザイテングラ

トのところまで注意してくれた人だったのである。なんとも奇遇なことである。それからは、山の話が弾んだことは言つまでもないことである。

5月2日

今日は上高地までの歩行を残すのみである。山靴は止めて、普段のクツで歩くことにした。というのも、左右の足に計6カ所も靴擦れができ、皮がすりむけて痛くて山靴がはけないのである。

朝食を済ませて、出発する。見上げた空は、雲一つない快晴である。1日この天気が早かったならばと、思わないではいられなかった。それに気温も下がって、雪が締まって(アイゼンが良く利く状態)いるから、登りやすいだろう。

明神まで下ると、観光客の姿もチラホラ、河童橋付近は観光客が溢れていた。明日からは連休の後半が始まる。河童橋から見た前穂や奥穂のきれいだったこと。

3千以上の冬から、上高地の春そして、初夏の里と、ぼくは季節を自分の足で旅をした。春山は季節を遡る旅でもあった。

夕方6時、4日ぶりに我が家へ帰り着いた。

インフォメーション

*「かあさんねずみがおかゆをつくった」を当店で買い求めのお客様へ!

2月に福音館から復刊されたこの本は、8

頁に渡って落丁している可能性があります。お調べの上、もし落丁本なら、至急お持ち下さい。お取り替えいたします。

福音館から文庫が創刊!

6月11日15点が出ます。

書名	著者	値段
大きな森の小さな家	L・ワイルダー	630
くまのパディントン	M・ボストン	630
木かげの家の小人たち	いぬいとみこ	735
トンカチと花將軍	舟崎克彦	630
魔女の宅急便	角野栄子	735
二年間の休暇(上)	J・ベルヌ	735
二年間の休暇(下)	J・ベルヌ	683
宝島	R・ステイプ ンソン	893
砂の妖精	ネスビット	788
イギリスとアイルランドの昔話	石井桃子・編・ 訳	788
ロシアの昔話	内田莉沙子・編	998
人間だつて空を飛べる	V・ハミルトン	735
少年動物誌	河合雅雄	735
幼ものがたり	石井桃子	788
小さな反逆者	C・W・ニコル	735

講演会とフィールドワーク

昆虫などの自然写真家の海野和男さんをお招きして、下記の予定で講演会とフィールドワークの集いを計画しました。

海野さんはテレビの「動物奇想天外」などで、ご存知の方も多いと思いますが、前回も(3年前)とても楽しい会でした。

「海野さんをまた呼んで」というご要望が多かったので、再びお願いしました。

9月14日(土)

講演会

9月15日(日)

フィールドワーク

詳細は次号以降にお知らせいたします。(開催日はいまのところ予定です)

今月のお話の会

宮崎さんの「ばあやのおはなしかご」は今月5月25日(土)午後2時からピッポで開催します。どうぞおいでください。

編集後記

ピッポ新聞の題字の横にある写真の山は、マッターホルンです。なぜ出しているかと言えば、この山に必ず登るといふ、ぼくの決意表明です。しかし、未だ実現していません。時ばかり経っていきます。必要な時間は、体力とお金です。この三つが揃うのはいつになるのでしょうか?あー神様(カミさん)!